

# 岐阜縮緬に関する一考察

高間由美子

## 緒言

岐阜県は、古くから「飛山濃水」といわれ、  
県域北部の飛騨地方は、山地が拡がり、南部の  
美濃地方には、木曾川・長良川・揖斐川の三川  
の水に恵まれた濃尾平野が開けている。この三  
川の中流あたりにいくつかの町があり、これら  
の町を中心として江戸時代には養蚕が盛んに行  
われ織物業が栄えた。この地方の絹織物生産の  
歴史は古く、養老の『賦役令』に美濃の紵があ  
り、また、11世紀後期の成立とされる『新猿楽  
記』には美濃八丈の名がみえる。下って天明8  
年(1788)の序文をもつ『絹布重宝記』は全国  
の絹織物の銘柄、産地等について詳細に説明し  
た書であるが、その中で美濃縮緬、一名曾田井  
縮緬は「絹至って器用なり云々」とあり、京縮  
緬や浜縮緬に次ぐ上質の縮緬とされていた。曾  
田井は武儀郡曾代、現在の美濃市曾代で、かつ  
ては、このあたりが縮緬生産の中心地であった  
ことを思わせる。

美濃縮緬が、いつから岐阜縮緬といわれるよ  
うになったのかははっきりしないが、生産の中心  
地が現在の美濃市周辺から岐阜市とその周辺へ  
移ったこと、および岐阜の特権町人の手を経て  
この地の縮緬が京都の市場へ送られたことなど  
によるのであろうか。尚、工芸志料(明治10年  
序文)には、岐阜産の紋縮緬を岐阜縮緬という  
と記されている。

明治時代には、美濃縮緬にかわって岐阜縮緬  
と呼ばれており、生産は主として長良川に近い  
現岐阜市域の中部、北部であった。現在、岐阜  
縮緬はその名さえもほとんど馴染みのないもの  
となっはいるが、その間の経緯を検討し、そ

こに関わる事情をみることにより、郷土の産業  
の歴史の一端を明らかにできればと考えている。  
同時に現在の養蚕の調査を通して多少なりとも  
現代とのつながりが見えてくればという微かな  
望みを抱いていることも隠せない。

## 岐阜縮緬の起源

岐阜地方一帯は、古代から絹織物の産地とし  
て知られていた。11世紀初頭に成立した『延喜  
式』に記録された調庸及び交易品から当時の生  
糸の産地をみると、上糸国として美濃、近江等  
12ヶ国、中糸国として尾張、丹後等25ヶ国が列  
記されている。また、15世紀始めのものとして  
『庭訓往来』には「美濃国よりよき絹出ずる」  
として美濃の上品があげられ、『毛吹草』にも糸  
綿、絹(美濃)とあるように、古代中世を通し  
て絹生産地として美濃の名が見える。

縮緬の起源については、つまびらかではない  
が、天正年間(1573~1591)に明人より其法が  
泉州堺の機業職工に伝授され、製織され始めた  
とされる。<sup>註1</sup> その後の縮緬産地の成立と岐阜  
縮緬の関わりを以下に述べる。

『岐阜志略』<sup>註2</sup>によれば「慶長のころ、尾州  
長島川内村加藤伝左衛門・太田孫右衛門・伊藤  
某の三人が一族をひきつれて岐阜へ引き越し、  
初めてうすぎねを織り出し、京都その他諸国へ  
売り出した。尾張では、尾張八丈と名付け、三  
人が岐阜へ移住してからは岐阜の名物となった。  
近年は紗綾、縹紗を織り出している。」という。  
また「享保15年(1730)に京都の西陣で大火が起  
こり、たまたま罹災した職工が岐阜へ移住し、そ  
こで縮緬の製作の技術を伝授し、やがて稲葉郡  
島村早田馬場の人嘉兵衛(一説に後藤嘉右衛門)

が始めてこれを織り出したといわれている。<sup>註3</sup>  
更に岐阜縮緬工業組合の機関紙『岐阜縮緬』には「享保の頃に稲葉郡島村大字早田の人後藤嘉右衛門が初めてこれを織り出したり」と記されている。

『工芸志料』では「元文3年(1738)京師の織工上野の桐生に來りて縮緬を製する巧を伝う。東国に於いて縮緬を織ること此に始まる。此の際、美濃の岐阜、近江の長浜、丹後の宗山の織工もまた縮緬を織り出す、また京師の巧を伝うるなり。既にして岐阜の工人、紋縮緬を製す、其の緻密なること、京師に製する所の者に異ならず。而して其の織り出す所、京師よりもまだ多し、故に世人紋縮緬を称して岐阜縮緬という。」とあったことが知られる。

その後の岐阜縮緬に関しては「文化年間(1804~1817)より鏡島村、大洞某なるもの京都西陣にて紋縮緬の製造を伝習して帰村後、織り初めたるものなり」との記述がある。<sup>註4</sup>

この様に起源についてはいくつかの説があり、実際のところ判然としないが、この地方の縮緬生産は、享保の頃から行われたとするのがほぼ定説となっている。

享保17年の序文をもつ『万金産業袋』には美濃縮緬の名はみえないが、天明9年版の『絹布重宝記』(1877年序文)には、美濃縮緬、美濃紋縮緬についての記述があり、享保に伝えられた製織技術は、急速に美濃地方一帯に広がったことが想像される。

## 生産と販路

### (1) 生産

明和年間(1764~1771)岐阜地区の織物生産量は下記の如く<sup>註5</sup>で、多様化しつつ成長する姿がうかがえる。

絹 2000疋程 内1000疋程岐阜町方、1000疋程在方

縮緬 6000疋程 内2000疋程岐阜町方、4000疋程在方

せんし 2~30疋程

しほん 2~30疋程

立紹 3~40疋程

立麻 5~600疋程

この時期に著しく生産量が増加した理由のひとつに高機の導入があげられる。それまでの原始的な居座機から当時西陣で使われていた高機に切り替えられたことである。この技術革新によって繁栄した岐阜縮緬は、販路となっていた京都の西陣機業家を脅かすこととなり、ついに京都町奉行によって京都で売り捌くことが禁じられた。このため、明和2年(1765)には通常の年の半分まで生産量が減少したといわれる。

こうした事態の打開策として、岐阜縮緬を尾張藩の年貢品である「御蔵縮緬」の名で京都での販売認可を得ることを藩に願い出た。明和8年(1771)(一説に安永3年)に「尾州御蔵縮緬」の名をつけることを許され、これを扱う商人は、反物一疋につき御為銀5分を上納し、尾張藩の拂い下げ品として再び京都絹問屋へ出して売り捌いた。尚、この縮緬は、毎月6回4、9の定日に一疋毎に尾張藩の改印を受けたもので、これは幕末まで続くことになる。この結果、天保の頃(1830)には、厚見、方県、羽栗の三郡にわたり、年に30,000疋におよぶ縮緬が生産されたといわれる。<sup>註6</sup>

このように絹織物業、特に縮緬製造業の発展は著しいものであった。江戸時代における岐阜縮緬は、生産者を兼ねていた織元と織元の輩下に賃金で織っていた小前百姓の賃織生産者により、生産されていた。

織元は、町場で織機を置き、内機工場を経営する。一方で、周辺の農家に原料を支給して生産させる「出機」、あるいは「賃機」と呼ばれる経営もした。この「出機」は農家の副業として、家計補助の役割を果たしてきた。

織元の戸数は寛政11年には岐阜21戸、加納15戸、竹鼻11戸であった。その中で加納の15戸の織元と賃織生産者の分布を表2に示す。

加納に76戸の賃織生産者がいるところから岐阜、加納に比較的規模の大きい織元が存在しており、この地が縮緬生産の中心地であったと考えられる。

表2 加納領織元傘下の質織生産者の分布(寛政11年)

織元	加納	上川手村	近島村	西荘村	本荘村	上加納村	忠節村	東島屋村	笠松村	小熊村	鏡島村	萱場村	下印食村	その他	計
嘉兵衛	3		1		1	3	2	1	1		2		4		18
太兵衛	1		5	1	1		1				1		2		12
佐衛次	2	2			1	1			2						8
助左衛門	2			4											6
領八	2				2									1	5
兵藏	2				1	1								1	5
庄藏	3	2													5
字八	1	1											1	1	4
佐左衛門	1				1				1	1					4
伊八		1			1								1		3
新兵衛			2												2
友左衛門	1														1
伊助	1														1
利八		1													1
願左衛門		1													1
計	19	8	7	6	6	4	3	3	3	2	2	2	2	9	76

出典：水口屋文書(岐阜県史 史料編 近世6)

注：「その他」は、今泉村・六条村・菟部村・領下村・健屋村・一場村・大場村・太田宿・土井原村で各1戸。なお「鳥屋」は東島屋村に、「川手」は上川手村に含めた。

## (2) 販路

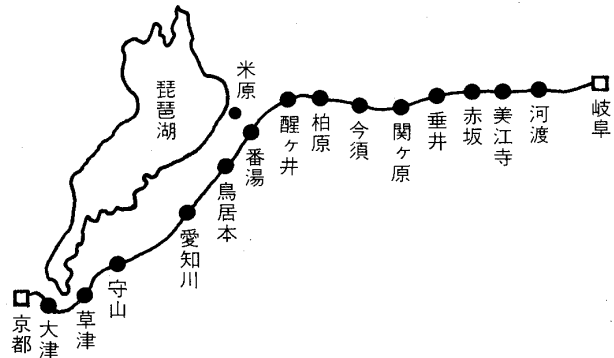
この頃の運搬経路としては、岐阜から中仙道を西へ進んで長良川にいたり、長良川の渡しには「鏡島湊」が使われていた。今でも湊の荷を上げ下げする「日傭稼ぎ」に農閑期の人々が集まったという言い伝えは残っているものの、湊の面影は全くない。<sup>註7</sup>

しかし当時鏡島は、岐阜の外港として重要な位置を占めていた。この船つき場から河渡へ渡り陸路を西へ、近江の米原方面に送り京都へ売り捌いていたと考えられている。

図1は、鏡島村から河渡までの渡し、図2は河渡から京都までの陸路を上り下りの駄賃<sup>註8</sup>を参考に簡単な地図に書き表したものである。

尚、陸路は、当時の五街道のひとつ中仙道の宿場に、ほぼ一致する。

図2岐阜から京都までの陸路



いま中仙道沿いの鏡島には、有名な弘法大師を祀る乙津寺(鏡島弘法)がある。この境内の入り口左側に「朝日縮緬」の石碑が建っている。昭和5年10月という建立年らしいものは記されているが、建立の由来、建立者名などは記されていない。朝日縮緬とは、明治30年代、新しい織物の研究開発をすすめる間にあって経糸に生

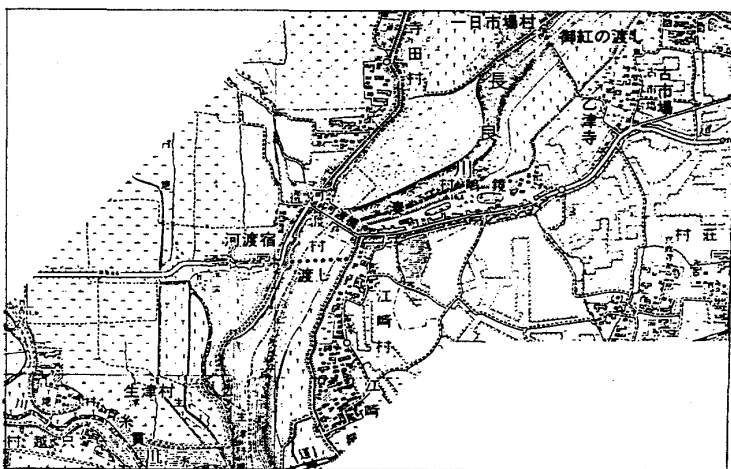
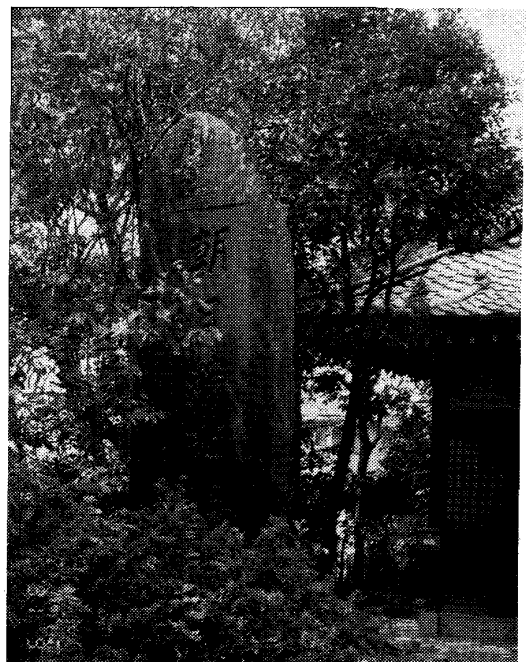


図1河渡の渡し

出典：水野時二著「紀行」



朝日縮緬の石碑

糸、緯糸に最下級の絹紡糸、すなわち生糸製造時に出る屑まわたを紡いだ糸を使って縮緬（いわゆる玉紡縮緬で紡縮緬とも呼ばれた）を織ることに成功し、朝日縮緬と名付けられて製品化されたもので、石碑は明治41年頃から大正末までの約20年間、安価で良質の縮緬が世に送り出された記念碑である。

### 縮緬の品質

すでにみたように、縮緬が日本で始めて織られたのは、天正年間（1573～1591）のこととされている。ほぼ同じ頃に光絹と呼ばれ、美しい光沢で人目を引いた羽二重や紗、紋紗、金紋紗、金欄、緞子、縹子などの製織も始まった。

日本人が日本の風土と社会に最も適合した衣服を完成させたのが、安土桃山時代であり、それは、小袖の成立期ともいわれるように着流し一枚着の小袖の普及であった。その素材として縮緬は綸子とともにしわにならず「しなやかにふりよきもの」<sup>註9</sup>として多用されていた。

縮緬は細かい「しぼ」が全面にあるのが特徴である。この「しぼ」の立体的効果は、強撚糸を用いることと、布に織ってから精練することにより生ずる。平織りの経糸に生糸、緯糸に右撚りと左撚りの強撚糸を交互に打ち込み、製織後精練すると強撚糸の撚りが戻って布面に「しぼ」ができると同時に絹特有の艶やかさを持った製品として仕上がるのである。

一説にこの「しぼ」はチリメンジャコ（語源は縮緬雑魚）<sup>註10</sup>と呼ばれる小魚の集団が作り出すさざ波に似ていることから、縮緬と名付けられたという。

岐阜縮緬の種類は、糸の太さ、撚りの数、糸密度、撚りの方向の違う糸の配列の仕方などにより多様である。すなわち、山蛹糸総縫取紋縮緬・紋縮緬・絹縮山蛹糸紋総合縫取・山蛹糸入紋縮緬・踏仕掛鶉紋縮緬・踏仕掛一松縮緬・白無地縮緬・烏帽子縮緬・山蛹糸入縞無地縮緬・生縮緬羽織地などがある。<sup>註11</sup>

次に岐阜縮緬（美濃縮緬）の特徴を『絹布重宝記』<sup>註12</sup>からみてみることにする。「絹至って

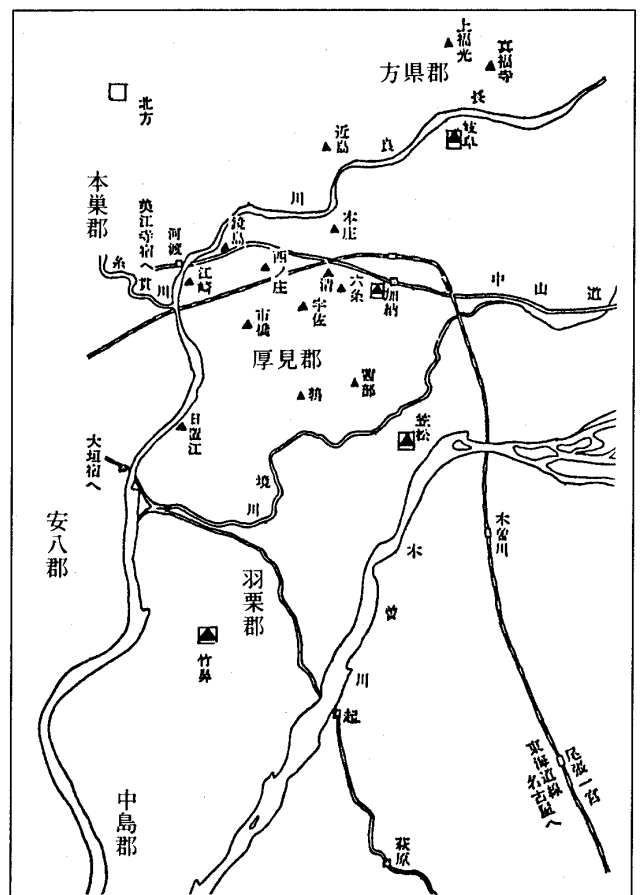
器用なり、しぼ細かく浜縮緬ほど畦立たず、糸の縷若き方なり、縹糸交ること有り心得べし美濃の縮緬彼地より練て登る、全体少し赤みのある方なり、紋付には京にて湯火し、青みを付べし、染つき浜縮緬よりすこしはえ有方なり、小紋にして最上の絹なり」とあるように、しぼは細かく浜縮緬ほど畦は目立たないものであり、紋付きや小紋用の生地として浜縮緬と肩を並べるほどの品質であった。

ただ残念なことに岐阜縮緬は、今は、衰退してしまったため、現存するものは非常に少ないが、品質の良い縮緬であったらしい。

### 生産地域と生産高

#### (1) 生産地域

図4 美濃機業地要図



▲岐阜縮緬の産地

□問屋商人のいた町

丹羽弘著「近世後期における農村工業の展開過程」により作成

岐阜縮緬の生産地は、図4にみられる様に、境川より北の現岐阜市域の中部を中心に分布しており、岐阜縮緬の名が示す如く岐阜とその周辺諸村から織り出されていたことがわかる。この地域を含む濃尾平野は、木曾川、長良川、揖斐川の三大河川が集まる低平な三角州である。この辺りは、河川が増水するたびに農作物に大きな被害を受けてきた。このたび重なる水害に悩まされてきた農家では、耕種農業の不安定さから「年貢の足シ」<sup>註13</sup>にと養蚕、製織を始めた。それにより、いくらかでも現金収入を得て経済的な不安を多少なりとも解消しようとしたのである。こうした事情で始められた「副業タル本織物」もやがて「全盛ヲ極メテ」に至り、各地に販出するまでとなった。

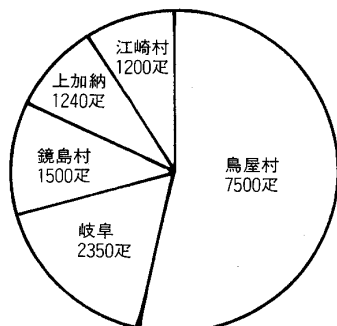
## (2) 生産高

明治時代前半における縮緬の生産地は、厚見郡、方県郡、羽栗郡、本巣郡、の一带に分布しているが、その中でも厚見郡の生産量が圧倒的に多い。表3に示すように厚見郡の生産量は全体の95%余を占め、他郡に比べ格段の産出量を示している。

表3 郡別縮緬生産量(明治14年)

郡名	生産量	割合
厚見郡	26,661 疋	95.6 (%)
方県郡	418	1.5
羽栗郡	444	1.6
本巣郡	355	1.3
合計	27,878	100.0

図5 厚見郡内の縮緬生産量内訳(明治14年)



岐阜市史 史料編近代1 1977より作成

また、図5は、厚見郡内の生産量を村別に示したものである。郡内では鳥屋村での生産量が7,500疋と格段に多く一か村で厚見郡全体の約半分を織り出している。

## 岐阜縮緬会社の設立

封建社会における流通機構は、明治維新以後社会情勢の変化とともに徐々に崩れ始めた。

幕藩時代に長く行われてきた尾張藩による保護と統制は、廃藩置県によってなくなり、織元、問屋の支配統制が弱まり、生産量は年産10,000疋前後までに落ち込んだ。自由競争がもたらしたものは粗製乱売と、それに伴う流通ルートの混乱であった。

この様な状況への対策として織元、問屋は、下織支配の再強化と、そのための県の保護を求めた。その動きが縮緬会社の設立である。明治5年に創設された「岐阜縮緬会社」は、取引の不正や粗製乱売をなくすことを目的としたものであったが、加入者が少なかったため翌年7月に会社加入者に鑑札を発行し、無鑑札者の営業を禁止し、加入の推進を計ろうとした。しかし、この試みも効果はなく、会社は明治12年に解散に至っている。

その2年後の明治14年に再び岐阜縮緬同業者が集まり組合を設立したが、これも所期の目的を達成出来ず24年に一旦解散、翌25年8月に改めて「岐阜縮緬組合」を設立した。この組合には80名の加入者があり「同業者中加入セサルモノ一人モナキノ好成绩」<sup>註14</sup>と言われた。組合では粗製乱造を防ぐため、製品の検査結果を証紙貼付で表示し製品改良に務めた。それでも製品の品質は向上しなかったため、組合は品質向上を目的として27年4月に「岐阜縮緬共進会」を開催した。この時出品された製品は他産地に比べかなり水準が低く改良すべき点が多く指摘された。

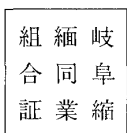
その後、明治33年重要物産同業組合法に基づき岐阜縮緬組合は「岐阜縮緬同業組合」と改称

され、それに伴って組合員の資格を有する者は一市三郡（岐阜市、稲葉郡、羽島郡、本巣郡）の「縮緬製造業」及び「組合内ニ於テ産出セン縮緬ノ仲買業ヲ営ム者」の二者とされた。組合員数は83名である。（尚、高橋慶太郎事績概要では286名と、同じ「事績」内の記述に違いがある。）

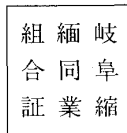
組合の目的は、製品の改良、営業上の弊害の矯正、及び販路の拡張である。粗悪品生産の防止のため証紙制度を取り入れ組合同業者に証紙を販売し、この証紙のない製品の売買をしてはならないとした。

上糸製品

玉糸製及絹糸紡績製品



(赤色)



(緑色)

図7 証紙

出典：尾濃機業取調報告書（明治前期産業発達史資料所収）

ついで翌明治34年、東海地区五県（三重、愛知、静岡、山梨、岐阜）の共進会が岐阜県主催で開かれることになり組合は目的達成のため積極的に参加することになった。この共進会は「第五回東海農区五連合共進会」で4月16日～5月15日までの30日間にわたり、岐阜市で開催されたが、岐阜縮緬の成績は芳しくなく「当時最モ重要視サレタル平縮緬ニ、一ノ受賞スラナカリシ」<sup>註16</sup>という結果に終わっている。

そこで更に製品の品質向上をはかるため同年11月5日～14日まで「一府二県連合縮緬共進会」が岐阜同業組合主催で開催された。参加府県は京都府、滋賀県、岐阜県の三縮緬産地である。その結果「縮緬ノ発達ニ非常ナル効果ヲ齎シ能率ノ向上品質ノ改善製織技術ノ進歩等ニ大ナル利益ヲ収メタリ」<sup>註16</sup>と評されるほどの好成績をおさめた。

また、明治36年4月大阪で開催された「第五回内国勸業博覧会」<sup>註17</sup>では縮緬製品の入賞の割合が、丹後4、長浜、岐阜各2と努力成果が表れ、ようやく他の縮緬産地に比肩できる技術水準に達したのである。

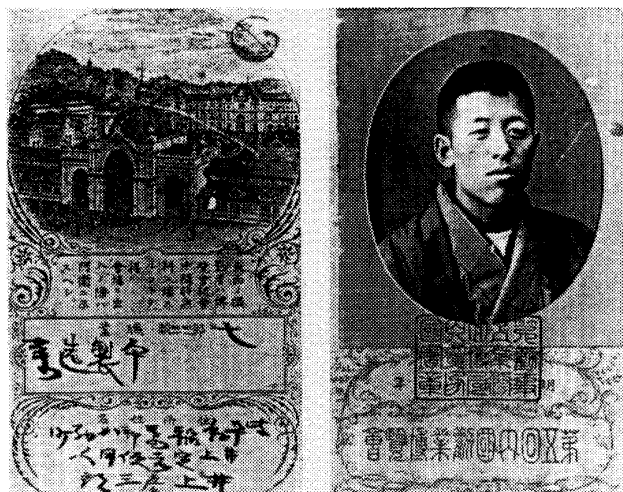


図8 第五回内国勸業博覧会出品者の身分証明書

出典：「加納町百年写真集」

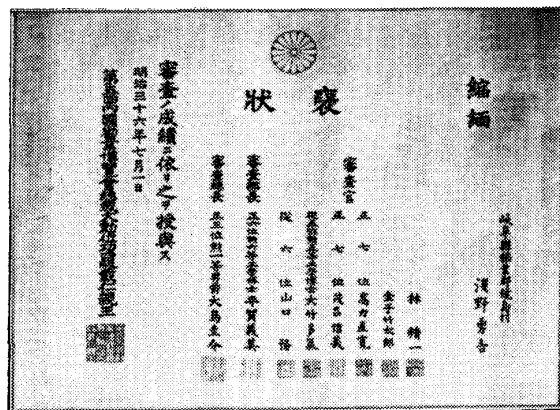


図9 第五回内国勸業博覧会賞状

出典：「岐阜織物史」岐阜織物工業協同組合

上述のように幾度か解散、発足を繰り返した組合であったが組合員の努力の甲斐あって明治初期から続いた粗製乱造の時代は終わりを告げ、岐阜は丹後、長浜とともに三大縮緬産地のひとつになったのである。

昭和6年工業組合法が改正され岐阜縮緬産地でも「岐阜縮緬工業組合」が設立された。組合の概要は、下記の通りである。

設立 昭和6年11月18日創立総会

区域 岐阜市、稲葉郡、本巣郡の一市二郡  
 組合員資格 縮緬その他の生強撚糸織物（生糸、絹紡糸、人造絹糸、その交織およびこれらと他の糸類との交織を含む）の製造業者

設立場所 岐阜市本荘熊野前1941番地の1  
 共同施設 精練工場並製品検査所

この組合設立の目的は、共同精練の設備と製品検査の実施を行って製品の向上と粗製防止につとめることにあった。これまで岐阜縮緬の精練工程の多くは京都の業者に依存していたため、岐阜は産地にもかかわらず精練済みの製品の検査が行えず、産地外問屋に利益の多くを吸収され、機業家の立場も弱いものであった。そこで「組合員ノ製品ハ総テ共同施設ノ精練工場ニ於テ精練加工ヲナスヘシ」と義務づけることにより、製織から精練までを産地で一貫して行い、地元の機業の保護につとめたのである。

### 機関誌『岐阜縮緬』

岐阜縮緬工業組合の発足から数年経過して、組合の事業も軌道にのってくと組合の機関誌

図10 『岐阜縮緬』 S11.4.15発行

別項岐阜市主催躍進日本大博覧會々場岐阜縣館中央に岐阜縣織物組合聯合休憩所を設けられた其處には見本品の陳列、「卓と椅子」「お茶とコーヒー」それに二九からぬ十七、八歳の頗る付き別嬪勿論素人娘三人が派手な友禪模様の岐阜縮緬を着流してサービスを捧げてゐる。それに我組合では「ハガキ大」の高尙な印刷物表紙には岐阜市を表彰する五版彩色美麗なる印刷に裏表紙には岐阜驛發各列車の時間を刷り込み岐阜市附近の略圖に本組合の位置を示し次の紹介文を一万餘枚を刷りて訪ふ人、聞く人、イヤ通る人々にその美人のお手づから「ドゾオ持チ歸リヲ」「汽車ノ時間表モツイテ居マス」と宣傳是れ大に努めてゐます。

### 岐阜縮緬の宣傳

『岐阜縮緬』の発刊が企画された。ちょうどその頃、岐阜市主催で「躍進日本大博覧會」（昭和11年3月25日～5月15日）および「第五回全国工業組合大会」（4月17日）が、開催されることになり、機関誌創刊号は、それに合わせて4月15日付けで発刊されることになった。

この催しは、岐阜縮緬の宣伝のための絶好の機会であり、販路拡張にも好都合であった。当時の観覧者へのサービスぶりの一端を『岐阜縮緬』誌から窺うことができる。

この他下記のような岐阜縮緬の紹介文も配布された。セールスポイントを示すものとして興味深い。この宣伝文句は、その後も誌上にたびたび掲載されている。

尚、機関誌『岐阜縮緬』は毎月15日に発行される月刊誌で多様な内容を掲載する方針で新聞紙法による供託金を出して一般に投稿を呼びかけた。

図11 『岐阜縮緬』 S11.4.15発行

御 紹 介  
 「岐阜縮緬」は岐阜市及其の付近の家内工業を主とする古い伝統と歴史に育てられ丹後、長浜と並んで我國の三大縮緬として皆様の御愛顧を蒙つて居ります。  
 「岐阜縮緬」は強撚糸織物ですからサラリとした快い肌触りを持ちおからだにシツクリ副ひまして着付がシナヤカで他の絹織物の追随を許しません。  
 「岐阜縮緬」は白生地を儘精練仕上げますからお好みの色や柄に染めて頂く事が出来生地が丈夫ですから染更へも利き流行にも外れずお徳向で御座ります。  
 「岐阜縮緬」の内でも縮緬と紋縮緬は他産地の真似の出来ぬ風合ひを持ち此の外無地、柞入、山藪、金縷糸入等時代の風潮を織込む所本産地の誇りであります。  
 「岐阜縮緬」工業組合は皆様の御愛顧に背かぬ様一層品質の向上と信用の保持とに努め共同精練と検査の断行を致して居ります。  
 「岐阜縮緬」は厳密な検査をして合格品には「赤判」不合格品には「青判」を押し、亦其の理由「瑕疵汚染織段短尺等」を明示してありますから素人の御方でも買取りがありません。  
 「岐阜縮緬」は一反毎に本製品には正絹判が押しありまして証印には正量何処が記入してあり人絹には丈尺が入れて有りますから御買上げが絶対安全であります。

〔附記〕

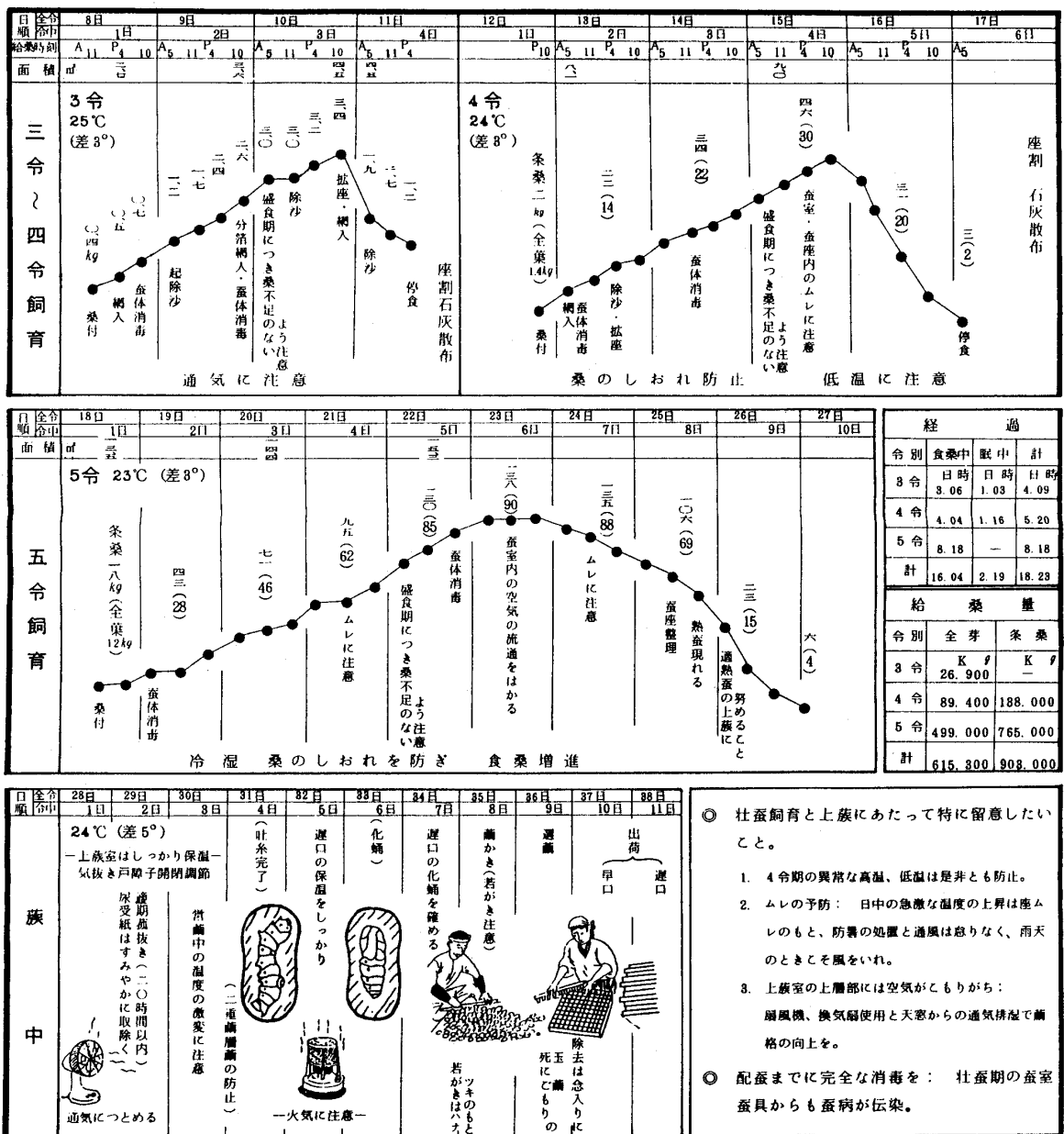
春蚕の飼育

1992年4月15日、山田千葉子さんを訪ね、春蚕の飼育を観察させて頂くよう依頼し、快く引き受けていただく。

表4に基づき5月15日から飼育が開始された。以後6月13日の出荷までを観察しながら、同時に蚕の成長にともなうその時々のお話をうかがい、養蚕に対する細やかな心遣いにふれることができたことはこの上ない喜びであった。

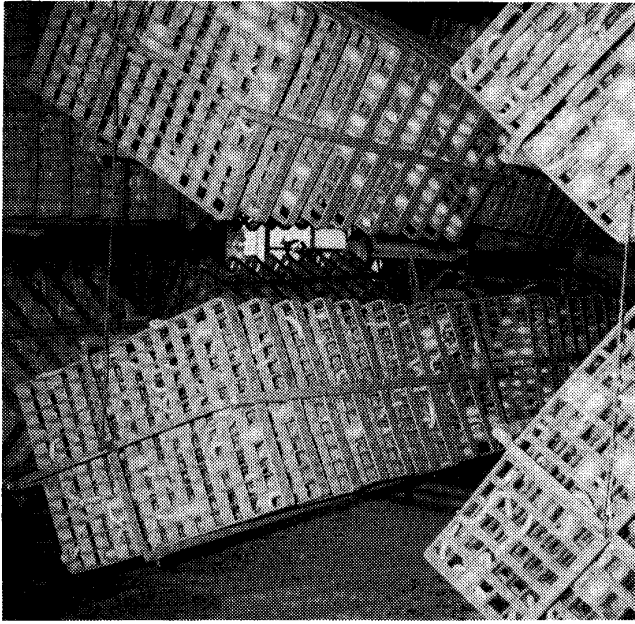
5月7日各務原市飼育所の無菌室にて飼育が始まり、5月15日の朝、飼育所へ蚕を受取に行く。この時、蚕の体長は約1.5cmであった。この日から山田さんの蚕室で飼育が始まる。蚕室は四隅に温度計を置きストーブにて一定温度を保つ。5月28日には、体長約7.8cmになり6月2日には厚紙で作った「回転しく」に蚕が入れられて、そろそろ繭を作り始める準備となる。いわゆる5令飼育の終わりである。6月3日蚕の水分が抜け、体長約5.5cmになると、しく(まぶし)のひとつますごとに蚕が入るようになる。

表4 春蚕期 壮蚕飼育標準表 下記のような標準表により飼育される。



- ◎ 壮蚕飼育と上簇にあたって特に留意したいこと。
  1. 4令期の異常な高温、低温は是非とも防止。
  2. ムレの予防： 日中の急激な温度の上昇は座ムレのもと、防曇の処置と通風は怠りなく、雨天のときこそ風をいれ。
  3. 上簇室の上層部には空気がこもりがち： 扇風機、換気扇使用と天窓からの通気排湿で網格の向上を。
- ◎ 配蚕までに完全な消毒を： 壮蚕期の蚕室蚕具からも蚕病が伝染。





しくの様子

蚕は上へ上へと登る習性がある。しくの上部に、蚕が這っていくとその重みで一回転し、蚕は、また下から上へ這っていく。その繰り返しているうちに繭を作るための場所（しくのひとます）を捜すとのことである。

6月4日蚕は、繭を作り始めた。「糞をみて柔らかくつぶれる様になれば、あと3日で上がる（上簇一繭を作り始めること）ことがわかる。しかし、蚕の首のところを指で押さえてみて柔らかくつぶれる感じのものは、生糸ができてなく（繭糸腺が発育していない）そのうちに死ぬ蚕で、その反対に首のところを指で押さえてみて硬い蚕は、生糸がしっかり詰まっている。」とのこと。むかしのわらのしくに比べて、紙のしくでは、蚕が糸を吐き始めてもなかなか足場が固定せず蚕が可哀相だと山田さんは嘆いておられた。

出来上がった繭は、6月13日の出荷予定日までに、十分乾燥させ繭かきをし、選繭して出荷する。各農家でこの足並が揃わないと、出荷にも差し支えることになる。



繭かきの様子

以下は、山田さん御夫婦の話である。

「昔は、米国で繭を売ると35kgで100ドル、その100ドルで小麦粉25袋を買って帰って来た。」と煙草を吸いながら「蚕は煙草の煙をとでも嫌い、3回位吹きつければ死んでしまう。」と言われ近くの蚕に煙を吹きつけると、蚕は苦しそうに体をのけ反らせた。「だから、蚕を飼っている家の近くで煙草を栽培するだけで蚕は死んでしまう。」ともおっしゃった。

又、「昔の蚕は自然で放りっぱなしだったなあ。もちろん蚕を触るときは、手を洗ってはいたけれど、今の様に無菌室で人工孵化し、常に温度を調節し、清潔に保ち、しかも人工飼料で育てては、蚕も抵抗力がなく弱いのも当たり前かなあ。徹底消毒もやむを得ないのかなあ。」と昔を思い出しておられた。

山田さんのお宅へ通い始めてから約2ヵ月の間、御夫婦は絹のもつ素晴らしさを力説して下さった。それだけではなく、もっともっと多くの人々に絹の良さを知って欲しいと自ら小物や洋服、さらに団扇から提燈までさまざまな製品を通してアピールしておられる姿には、蚕を育て慈しむ暖かいお心の表れが感じられた。

## 繭の出荷先

羽島市の山田さん宅から繭の出荷先である高山市飛騨繭糸農協連高山社を訪問し、総務課水野善由氏にお話を伺ったことを以下に記す。

高山社の生糸は、大手商社へ出荷され、商社から京都、丹後の織屋へと出される。高山社の生糸、農林省の検査でも上ランクに入り、すべて着物用に使用される。全国的によると生糸の使用割合は、和装が90%、洋装が10%といったところ。それでも生糸が不足しているため輸入せざるを得ない状況にある。

繭は次の様な工程で生糸にされる。

養蚕家生繭出荷→生繭荷受→乾燥→貯蔵保管→選繭→煮繭→繰糸→湯返し仕上げ→かせ→生糸出荷→生糸検査→商社→織物工場

選繭したあとのくず繭も他の生糸と同じように扱われるが、くず繭は生糸にすると少し黄色味を帯び、継ぎ目も多いが、染色してしまえば、両者の見分けがつかないくらいのことである。

蚕も人間と同じように、夏や冬には体が弱り繭の質が違うところから、糸質を一定に保つために春蚕と夏蚕、あるいは秋蚕と晩秋蚕というように、バランスよく合わせて糸をひく。貯蔵庫には、一年分の繭が保管されている。

生糸をひく前に、毛羽取りをしたくずや糸口を捜すまでのくずは、繕って太めの糸にする。いわゆる絹紡糸である。この絹紡糸は、長野県の丸子町にある大手会社に出荷され帯用の糸として使用される。又、生糸をひいた後の薄皮も同じ絹紡糸になる。

最後の蛹も捨てることなく、横須賀の海での魚の餌づけ用、あるいは、大和郡山の金魚に餌などに出荷し、全て無駄なく使いきる。

尚、高山社では、昭和53年の第二次オイルショック以来、それまでの燃料の重油を木っ端（製材時の削りくず、木の切れ端）に切り替え燃料不足に対処した。飛騨は、木材の産地で木っ端には困ることなく、しかも経費制約にもなり一石二鳥というわけである。

## 要約

岐阜縮緬は享保の頃に、美濃一帯で製織されたことから、はじめは美濃縮緬と呼ばれ、その後、生産の中心地が岐阜市域に移り、岐阜の特権商人の手を経て京都の市場へ送られたことにより、岐阜縮緬の名が一般化したと考えられる。

また18世紀後半以降尾張藩の保護を受け尾州御蔵物として扱われてきた岐阜縮緬は、明治時代の廃藩置県に伴い、ひとり歩きを余儀なくされた。そこで縮緬同業者は組合を設立し、縮緬生産に従事したのである。

しかし、それ以後濃尾織物業は毛織物を中心に移行するとともに、伝統的な縮緬製織は衰退して現在はほとんどみられない。だが養蚕はいまなお続けられている。

近年、農業従事者の高齢化、労働不足等により繭生産は減少傾向ではあるが、養蚕等の維持発展のために養蚕経営の体質改善を推進し「ぎふ銘柄繭」の安定生産の向上に努めている。これにともない絹製品、繭糸工芸等の生産においても今後の発展を期待されている。

この様にすでに岐阜縮緬の製織は衰退しているが、全盛期には生産の中心地として知られている鏡島地域についての調査研究を次回の課題としたい。

本研究を行うにあたり、督励と御理解をいただきました神谷みゑ子学長、また御懇篤な御指導を賜りました相川佳子子奈良女子大学教授に感謝の意を表します。

また調査に御協力いただいた山田富善氏御夫妻、高山社の水野善由氏に深謝いたします。

## 引用文献

- 1) 「工芸志料：絹」東洋文庫254 (S49.6.26)
- 2) 「岐阜志略卷1：薄絹濫觴」(S9.7.5)
- 3) 「日本産業史大系 中部地方編」(1960.7.25.)
- 4) 「岐阜県産業史：岐阜県」(T5.3.31.)
- 5) 「美濃の織物に就いて」森義一著 (1938)
- 6) 「岐阜県産業史：岐阜県」(T5.3.31.)
- 7) 「紀行：中仙道③」水野時二著
- 8) 「岐阜縮緬：嚴重な岐阜縮緬の輸送者」森義一著
- 9) 「家政学文献集成：女鏡秘伝書」江戸期 I (S41.11.15.)
- 10) 「日本国語大事典」(S50.1.10.)
- 11) 「明治前期産業発達史資料：岐阜縮緬品類」第7集 (S37.11.25.)
- 12) 「日本経済大典」補巻1 (S51.4.15.)
- 13) 「美濃縞同業組合沿革誌」(S11.5.)
- 14) 「岐阜市史：史料編近代2」(S53.9.30)
- 15) 「岐阜市史：史料編近代2」(S53.9.30)
- 16) 「岐阜市史：史料編近代2」(S53.9.30)
- 17) 「明治前期発達史資料」第35集 (S48.6.10)

## 参考文献

- 「絹布重宝記」通俗経済文庫2巻  
「新猿楽記」東洋文庫424  
「染織史序説」三瓶孝子著 (S24.5.10.)  
「庭訓往来」東洋文庫242  
「日本の染織15：縮緬」西村允孝著 (S52.11.20.)  
「羽島市史」(S46.3.31.)  
「美濃国稲葉郡志」(T4.9.30.)  
「宮崎肇文著：岐阜県機業の発達史 明治維新前まで」(S27.11.3.)  
「岐阜織物史」岐阜織物工業協同組合 (S58.5.1.)  
「岐阜経済大学論集：近世後期における農村工業の展開過程」丹羽弘著 (S42.11.1.)  
「岐阜県史：通史編近代中」(S45.3.31.)  
「岐阜県史：通史編近代下」(S47.3.31.)  
「岐阜縮緬」岐阜縮緬工業組合発行  
「尾西と西濃の織物業」林英夫著